

# 世界の《交流拠点都市》を目指して 文化のまちづくり・文化の人づくり

やまのゆきよし  
山野之義  
金沢市長

## 新幹線効果で花開くポテンシャル

平成27年3月14日の北陸新幹線（東京～金沢間）開業から1年半が経過した今年9月、金沢市を訪問させていただいた。台風余波の断続的な雨が降るあいにくの天候だったが、金沢市は行く先々で国内外の観光客が醸し出す、華やいだ熱気に包まれていた。

北陸新幹線開業のもたらした直接的効果および波及効果については、さまざまな報道がなされてきた。中でも取り上げられることの多いのが、一種のブーム現象ともいえるほどの「交流人口の急増による金沢市、および金沢市を拠点に訪れる周辺地域（能登半島など）のにぎわい」に關しての話題だ。

実のところ「金沢市観光戦略プラン2016」（金沢市経済局）によれば、平成27年（1月～12月）の金沢地域への観光客入込客数は過去最多の1006万人を記録（前年

844万人）。また「平成27年観光調査報告書」（同）によれば、平成27年に金沢市内19の主要観光施設を利用した人の総数は約903万人で、前年の約598万人に比べ51%以上も増加している。これらの数値には新幹線開業前の3カ月間も含まれており、それでもこれだけ増えている。

またJR西日本の統計では、開業後1年間の長野～金沢間の新幹線利用者数は約926万人で、前年度の在来線利用者数に比べ3倍近い。特に長野市の善光寺で7年に1度の御開帳と重なったゴールデン・ウィークの新幹線利用者数39万人超は、前年度比3倍を超えている。シルバー・ウィークの利用者約23万6000人）に至っては前年度比4.4倍超を記録した。その分、自動車交通や航空路、在来線の使用率が低下したことは言うまでもないが、長野～金沢間を訪れる交流人口は交通手段の如何にかかわらず、総体的にはかなり増えている。



そのほか、宿泊施設の利用者（宿泊者）数および稼働率、外国人旅行者数の増加（例えば平成24年に比べ2.5倍以上の29万2000人）など、既に各種メディアが報じているように、新幹線開業後の直接的・波及的効果の大きさを示す数値を一つずつ挙げていけばキリがないほどだ。

だが金沢市では、こうした開業後の各種効果を、事前にかなり綿密にシミュレーションしていた。それだけでなく、開業によるマイナス効果すら、さまざまな観点から綿



北陸新幹線開業に沸き立つ金沢駅(平成27年3月)

密に想定していたという。従って、開業後のプラス効果が想像以上だったとする声が多いことに対し、山野之義金沢市長は、「想像を超える部分が確かにあったとしても、それは決して想定外ではありませんでした」と語る。さらに「想像以上のこともシミュレーションをし、あり得ることとして想定はしておりましたので、にぎわいが大きく増して本当に有り難いことだとはもちろん思いますが、決して驚いたりはしておりま



世界の交流拠点都市にふさわしい金沢駅のたたずまい

例えば北陸新幹線開業後の実際の波及効果で、行政関係者や旅行関係者などが「意外」と受け取ったことの一つに、東北方面(宮城県・福島県など)からの旅行者数が、54%も上昇したという事実がある。上昇率だけなら、関東方面からの88%増に次ぐ数値だ。旅行関係者や行政関係者の多くは、主に首都圏からの新たな交流人口の獲得に向けたシミュレー

### 常に本物を目指してきた 金沢の文化創造

せん(笑)」と続ける。



金沢駅鼓門の前で行われる恒例・百万石まつり(毎年6月)の出発式

ションに力を傾注していたために「意外」と感じられたようだが、北陸新幹線開業後の仙台北(金沢間は、大宮を経由すれば最速3時間22分で結ばれた。東京〜金沢間の所要2時間28分に比べても54分しか差がない。考えてみれば北陸新幹線開業以前の東京〜金沢間(越後湯沢経由)の3時間47分に比べ20分以上も速いのだ。

山野市長はこれについても「必ずそうなるとは想像しませんでした、そういうことも十分にあり得ると、想定はしていた」と語る。

山野市長のこうした想定の背景に、加賀藩・前田家が基盤を形成し、400年以上に



現代美術を展示する金沢市21世紀美術館は日本一の人気ミュージアム



金沢職人大学校で伝統建築技術を学んだ研修生は全国で活躍中

わたって先人たちが築き上げてきた金沢のまちが持つ文化交流都市としてのポテンシャルへの揺るぎない自負が感じられる。

北陸新幹線の開業で、首都圏と直結するなご交通環境が整えば、そのポテンシャルの「秘められていた要素のかなりの部分が開花するだろう」という想定が、開業から1年半を迎えた現在(取材時)、実際に裏付けられたということでもあるだろう。

そして「金沢市における、そうした文化交流都市としてのポテンシャルの源泉をあえて一言で言う」との当方のぶしつけな質問に対しても、山野市長からは即座に、「金沢には《本物》がたくさんある、ということだと思います」との明快な答えが返ってきた。

料理、和菓子、陶芸、漆芸、金箔文化、友

禅染、水引をはじめとする各種のクラフト製品など、金沢には実際、武家文化と町人文化を融合した独自の伝統文化の粋とされるモノ・コトがたくさんある。

「それらのモノ・コトは金沢というまちを形成してきた加賀藩・前田家以来の先人たちによる、常にクリエイターを大切にすることが培ってきた伝統の賜物(たまもの)であると同時に、現代の金沢にも脈々と流れているDNAなのだと考えています。そして現代に生きるわれわれの使命は、そうした《本物》の文化を継承しつつ、さらに新たな創造的価値を加え、それを発展させるための新たな仕組みとともに、DNAを次世代につないでいくことにあると考えます」(山野市長)

加賀藩・前田家には幕藩体制ならではの、

金沢」を掲げて平成25年3月に策定された基本構想、「世界の「交流拠点都市金沢」をめざして」に既に示されている。

その1年後で、北陸新幹線開業1年前の26年2月に策定された『世界の「交流拠点都市金沢」重点戦略計画』では、DNA継承のための具体的な施策の方向性がより明らかにされた。ここに改めて示された5つの重点方針と、10の重点施策は次のようになる。

◇重点方針1. 技術力に裏打ちされた新たな産業の創出「そのための重点施策Ⅱ 価値創造拠点の整備、金沢クラフトの発信強化」

◇重点方針2. まちの品格を高める学術文化の醸成「そのための重点施策Ⅱ 学術・コンベンション機能の強化、文化資産の活用・発信」

当時のクリエイターとのコラボによる文化創造のための仕組みがあった。現代の金沢市が目指すそのDNA継承のための大きな仕組みづくりへの意気込みと具体策は、平成27年3月の北陸新幹線開業を前に、そこから生まれる社会的・経済的なプラス効果を最大限に活用し、金沢市を活性化させるための新たな都市像「世界の交流拠点都市・



根強い人気の名勝・兼六園は金沢市の変わらぬシンボル



金沢城を和服体験で訪れる外国人観光客が急増中

◇重点施策3. 観光を軸とした交流の活発化

「そのための重点施策Ⅱグローバル観光への対応強化、スポーツの振興・拠点整備」

◇重点施策4. 新幹線時代に対応した交通基盤の整備

「そのための重点施策Ⅱ国際物流等の拠点整備、都市内交通ネットワークの確立」

◇重点施策5. あらゆる世代に対応した新たなコミュニティの形成

「そのための重点施策Ⅱ市民交流・人材育成機能の強化、交流による里山の活性化」

この『世界の「交流拠点都市金沢」重点戦略計画』は、独自の伝統文化のDNA継承を最大の軸に各種の戦略が練られているという意

味で、まさに金沢市ならではの特質を生かした、具体的かつ意欲的なまちづくりの戦略計画になっているといえる。

### 自立した都市と

### 市民が形成する交流拠点都市

「都市像でいう交流拠点都市とは、歴史および伝統文化を大切にすることでこれまでのまちづくりを継承しながら、北陸新幹線開業を契機に人・モノ・情報のさらなる集積を図り、その交流を通じて新たな価値を創造するとともに、持続的に発展していくことを可能にするまち、そんな仕組みを持つまちといえます」

(山野市長)

そしてその基軸となるのが、再三言及してきた《本物》を生み出し、維持・継承していく文化力なのだ。それを支えるのは先の「常にクリエイターを大切にする文化」という山野市長の言葉が示すように、加賀藩・前田家以来の文化を担う人づくりを継続してきたという歴史的事実の積み重ねだ。

現代の金沢市における文化を担う人づくりは、より広範囲かつ重層的になっている。特に文化を担う人づくり事業のうち、伝統技術・文化の面で象徴的な存在になっているのが、平成8年10月の開校以来、幾多の卒業生（専門技術者）を輩出してきた「公益社団法人金沢職人大学校」だ。

武家文化と町人文化が高度に融合した金沢市には、金沢城や兼六園などの史跡のほか、茶屋町、長町武家屋敷跡、寺町、近江町市場



伝統工芸の現場がみられるクラフトツーリズム(水引専門店「津田水引折型」)

などから一般住宅に至るまで、近世に生まれた建物が、あるものはそのままに、あるいはリノベーションを繰り返しながら、現代に息づいている。ちなみに2つの茶屋街(ひがし、主計町)および2つの寺院群(卯辰山山麓、寺町)は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されているなど、歴史文化的な価値の高い事例が多い。金沢職人大学校は、指定文化財はもちろん、金沢市の日常的な生活空間に普通に根付いているような文化財級の建物や、そこで使われている伝統的な家財なども含めた、広い意味での文化財を保存・修復する技術者を養成することを目的に設立された。

石工科、瓦科、左官科、造園科、大工科、

畳科、建具科、板金科、表具科に分かれた本科(各組合推薦の30歳以上の経験者、定員50名)と、本科修了生で構成された修復専攻科(文化財の修復技術者養成)があり、修学年限は各3年と定められている。つまり伝統技術を習得した専門技術者が既に700名以上生まれていることになるわけだが、重伝建地区を抱える自治体の中でも、このような形で保存・修復体制を構築している例は、ほかに類を見ない。

各種の伝統工芸(クラフト)に関する人づくり体制も充実している。中でも注目されるのは今年度から始まった「金沢市文化の人づくり基金」の仕組みだ。金沢市には加賀友禅や和傘、焼き物、水引、和紙、表具、彫金、漆芸、竹細工などさまざまな伝統工芸が息づいているが、今年4月には「金沢市における文化の人づくりの推進に関する条例」を施行。既存作家の保護とともに、若手作家の育成のために子ども塾や各種の体験講座、学生塾、専門技術の研修講座などを組み合わせた、世代的にも技術レベル的にも切れ目のない育成システムを構築することが改めて発信されている。

同条例の施行に合わせ、それを支える資金として今年度から活用が始められたのが「金沢ふるさと納税」だ。金沢市ではふるさと納税の使い道を「文化の人づくりに活用」することを明言。寄付金を「文化の人づくり基金」に積み立てし、「伝統文化の継承発展と文化の創造を担う人づくりの資金とする」と定



平成7年開村の金沢市民文化村(24時間使用可能、金沢職人大学校併設)は市民ボランティアが運営参加する総合文化施設

めた。

「同時に謝礼として、寄付をしてくださった方には、市内で働く若手工芸作家の工芸作品をお送りすることになっています」と山野市長。寄付金が金沢市の文化を担う人材の育成に使われることを前提にふるさと納税した人にとって、これから伸びていく若手作家の作品を謝礼にもらう仕組みは、とても魅力的だろう。

また昨年からは始まった「金沢マラソン」では、上位入賞者に若手工芸作家がつくったメダルが贈られている。上位入賞者は彫金作品であったり陶磁器作品であったり、その年によって違う材質と趣のメダルがもらえるわけで、これも話題を呼んでいるが、若手作家に

とつても、こうした形で自分の作品の発信の機会を与えられることは大きな励みになるに違いない。

## 世界の交流拠点都市形成に向けた課題

北陸新幹線の開業後に改めて浮かび上がった課題も、もちろんある。例えば戦災を受けた課題も、もろろんある。例えば戦災を受けた課題も、もろろんある。例えば戦災を受けた課題も、もろろんある。



昨年から始まった「金沢マラソン」(11月) スタート直後の模様と伝統工芸作家制作の入賞メダル

じる交通渋滞など、観光客が増え過ぎたことによる市民生活への悪影響も徐々に始まっている。「特に市民の台所として300年以上も機能してきた近江町市場に、観光客の急増による観光地化が少しずつ目立ち始め、いろいろな弊害が出ていること」(山野市長)は、典型的な事例だ。

一部店舗で価格の相対的値上がりが散見されるようになったり、お年寄りが店の人とゆっくり会話しながら買い物をするような古き良き伝統の雰囲気、観光客の大幅増加で成り立たなくなりつつあるなどの指摘も、実際に聞こえてくるようになったという。

こうした増え過ぎた観光客の対策については、金沢というまちの特性を継続して発信しながら、独特な雰囲気損なわれないような観光の楽しみ方を、粘り強く啓発していくしかないだろう。その啓発へのコンテンツとして

も、金沢が擁する本物の文化は説得力をもっていくに違いない。また、交通の分野については、観光客をはじめまちなかの回遊性と利便性の向上を図るため

にシェアサイクル・システム(愛称・まちのり)を導入するなど各種の工夫のほかに、「公共交通ネットワークの幹となる新しい交通システムの導入についても、議論を積極的に進めていきたい」(山野市長とする)。

本物の伝統文化を維持・保全しながら、まちとしての新たな魅力を創造する。そうした文化的ダイナミズムに魅せられ、国内外から訪れる多くの人たちと市民とが、互いに無理のない形で交流することで、新たな発展の糧とする。そんな世界に開けた21世紀型の交流拠点都市としての「在り方」を独自に構築していくには当然、たくさんの困難と長い時間が必要になってくる。しかし、その目標の実現に向け、400年以上にわたって独自の文化交流都市として歩んできた金沢市は、果敢にチャレンジしようとしている。

「ビジネスマン時代から、リスクを背負って常に新しいことに挑戦する姿勢をモットーにしてきた」と語る山野市長による、伝統と創造の力で発展してきたまちに新たな価値を創造しつづけん引する、北陸新幹線開業後の金沢市のまちづくりは、これからのいよいよ本格化していく。

(取材・文 遠藤隆  
取材日 平成28年9月5日)



シェアサイクル・システム「まちのり」は金沢市観光の定番